

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返す、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さって構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

飲酒と喫煙

酒とたばこは昔から世界のどこにもある。酒はアルコールを含んだ液体で、多くは飲用だが、祭事、儀式等にも用いられる。素材は米、麦などの穀物、ブドウなどの果実が多い。製造工程も多様にある。

酒の効用の第一は人間関係の絆であろう。これらの要因が重なり合って、酒類は多種多様にある。

たばこは一種の草の葉を乾燥させたもので、点火して煙を吸うと気が安まるらしい。昔から成人男子の嗜みとして肯定されてきた。種類はたくさんある。

私は若い頃、公的な事務の仕事をしていて、職員が多くいて、勤務時間が過ぎると、上司、同僚、部下と一緒に仕事部屋でよく酒を飲んだ。参加は自由であった。私は酒量は少ないが、色々な話が出るので、かなり参加した。気の利いた世話役がいて、酒や肴が準備され、それを囲んで懇談するのは日常のことだった。飲む量には個人差があり、強要はなかった。後日世話役が割り勘として代を徴収して回った。

飲酒の量は自慢の種にもなった。職場全体で酒豪番付を作って、某々横綱、大関などと位付けして面白かった。ノーマル賞が贈られたりした。

酒呑みが多くなると、酒癖が問題になることがある。酔いが過ぎて暴言、不作法などの乱行に及ぶ人も少しいたが、多くは慎ましかかった。酒に酔って他に迷惑をかけても「酒の上だから」と大目に見る時代であった。

仕事が全国に亙るため、地方の自治体、県庁などと関係があり、地方への出張が時々あった。そんな時は行った先で飲食の接待を受けた。恒例化していて必ず酒が付いていた。費用は地方側が負担した。後に官々接待と言われて非難された。私も多数回経験したが、当時は悪いと思ったことはない。江戸時代、幕府の役人が藩に行けば接待を受ける習慣を連想し、ためらわず自然の事と思っていた。

仕事では出版物の刊行などがあり、印刷業者などが出入りしており、業者に招かれて会食をすることがあった。当然に酒が出た。費用は業者が負担した。私は好んで呑む方ではなかったが、若気の至りで度を越して酔い潰れ、介抱された覚えもある。

喫煙については他人ごとであった。若い頃の職場を思い出すと、男子の多くは喫煙しながら仕事をした。各喫煙者の机には灰皿があった。建物は木造 2 階建て、火の始末には十分注意するようにと、指令が出ていた。飲酒と喫煙は男子にとって当たり前のことであった。

子供の頃、飲酒と喫煙を経験したことを覚えている。小中学校は田舎であった。その頃は、中学を卒業すると社会人になるのが一般で、進学する者は少なかった。村には若い衆と呼ばれる青年達がいた。若い衆の最年少は 15 歳で、社会人であった。中学 3 年になると卒業して若い衆に仲間入りすることを見越して、若い衆は宴会の際に中三の男子を招いて酒の酌をさせた。酒とたばこは男子の嗜みとして、出来なければ肩身が狭い時代であった。未成年の若い衆も酒はよく飲んでいて、中三生に酒を覚えさせるのは、若い衆に仲間入りする(社会人になる)ための訓練のようなものであった。中三生は先輩に酌をして回った。すると「お前も飲め」と言って返杯され、応じた。酒は友情の絆であった。生徒の方も興味半分、喜んで飲んだ。強要はなかった。双方陽気に楽しんだ感じだった。こうして少年たちは酒を覚えていった。たばこも訓練させられた。先輩がたばこを指先に摘まむと、後輩はマッチに火を点けて差し出した。先輩は煙草を半分に千切って後輩に持たせ、啜えさせ、火をつけてやり後輩が吸うと言う次第であった。

中三の私は、酒は飲んだが、たばこは咽て咳き込み、喉を傷めてやめた。昭和 20 年代の中頃であった。あとで思うと、あの頃も未成年者の禁酒・禁煙の法律はあったが、村の若い衆は無頓着であった。

たばこについてはここ数十年、健康との関係が重視され、喫煙者数は漸減し、昔とは反対に喫煙者の方が肩身が狭くなっている。